おバカに憑依した現代人

ハットトリック

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

どんなアニメの主人公も、意外とおバカな奴である。

目立ちたくないにも関わらず、なぜか功績を上げまくって目立ちまくっている劣等生のお兄様のように。

これは、そんなおバカな主人公達の一人、黒鉄一輝に憑依してしまった男の物語である。

目次

追放 1
タイムトラベル 8
佐々木さん 15
NOUMIN 20

追放

皆さんは、アニメの主人公をバカな奴だと思ったことはないだろうか？

反論もあるだろうが、俺はバカだと思う。

例えば、「魔法科高校の劣等生」の中に出てくる司波達也。

「四葉の一員だとバレないようにしながらも妹の司波深雪を守る」というのが彼のやるべきことであり、彼自身の唯一の望み。

だが、そんな目的があるにも関わらず、普通の一課生として入ればただの美人な女子として捉えられるはずだった深雪に入試で総合一位にさせ、本人も入試で筆記テスト一位になって生徒会長に目を付けられ、挙句の果てには横浜騒動で自分が戦略級魔法師だとバレるところまで行っている。

例えば、「インフィニット・ストラトス」の織斑一夏。

ヒロインの一人であるセシリア・オルコットと言い合いになった時、「ハンデなんてものは戦いの中にいらない」などと言っておきながら、その直後に「俺がハンデをつけてやろうか？」などと矛盾したことを堂々と言っている。

例えば、「Ｆａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔ」の衛宮士郎。

聖杯戦争を勝ち抜いて平和を手にするのが願いなのに、自分の力が覚醒すらしていないような状況で自分自身が戦いの場に立った。
そんなこんなで、主人公たちはみんな真性のバカだと思うわけだ。
それで、なぜこんなことを話しているかというと……。

「なんだ、こんなこともできないのか、情けない。」
「それでも黒鉄一族か！」
「一族から追い出した方が良いのでは？」
「全くだ！」
そんなおバカな主人公達の中でも特におバカな主人公、黒鉄一輝になってしまったからだ。
なんでそんなことになってしまったのかはいつか思い出すとして、黒鉄一輝はトコトンおバカなのだ。
黒鉄一輝。「落第騎士の英雄譚」の主人公であるキャラクターであり、剣を数分打ち合わせるだけで相手の剣技を模倣でき、多くの武術を習い、自身の少ない魔力を一分間で全て消費させる技「一刀修羅」を開発し、努力のみによって高みへと登った騎士。
ここだけ聞くと、黒鉄一輝という人物は勤勉な人間だと思うだろう。

だが、俺にはそれがバカなことにしか思えなかった。

黒鉄一輝の一番の強みは、剣技である。と、俺は思うのだ。

「落第騎士の英雄譚」の中では「固有霊装」と言われる武器を使って戦うのが主流で、大体の固有霊装は刀の形をしていて、それは黒鉄一輝の物も例外ではない。

つまり、戦いの場において、黒鉄一輝が使うのは正直剣技だけで十分なのだ。

それなのに、多くの武術を学ぶ、などという戦闘には決して使わないようなことをバカみたいに続け、挙句の果てには自分の弱点である魔力をなんとかしよう、などと考え始めたのである。

魔力を何とかすることは、魔力が全てを決めるような世界の中では必要なものに思えるかもしれない。

だが、思い出して欲しい。

他のアニメの中では、剣技のみでアホみたいな強さを手に入れた人間も大勢いるのだ。

某型月世界の剣技のみで第二魔法に到達した新撰組の人斬りやＮＯＵＭＩＮ然り、一瞬で九回斬撃を放つ、なんてことをやってのける某人斬り抜刀斎然り、剣を振り回しただけで斬撃の竜巻ができる三刀流剣士然り、木刀一本で真剣を叩き斬った銀髪の万屋然り。

「落第騎士の英雄譚」も、それらと同じアニメワールド。
そんな感じのことができないことはないはずなのだ。
そんな事を思いついたのが四歳の時。
俺はそれから多くの道場を巡って様々な剣技を見続け、原作の黒鉄一輝と同じように模倣剣技（ブレードスティール）を身に着けた。
その後もただひたすらに剣にのめり込み続けて、道場に行くことができない日はただひたすらに剣を振り続けた。
その結果、とりあえず平行世界から一つ斬撃を呼び込めるようになりました（白目）。
まあ、そんなこんなで日に日に剣技を上達させて来ていたのだが、ここに来て黒鉄一輝としての問題に初めてぶち当たってしまった。
きっかけは、昨日の夜にいつもと同じように庭で剣を振っていたときのこと。
黒鉄本家に来ていた分家のところの息子が、俺が剣を振っているのを見て一通りバカにして、それでも俺が無視して剣を振っているものだから、逆ギレして俺に決闘を申し込んできたのだ。
まあ、当然剣の才能の鬼とも言える俺に勝てるわけもなく、そいつは惨敗して泣いて帰っていったのだが、その後がダメだった。
その翌日、つまり今日の朝にソイツの親が一族会議みたいな場所で、俺についてある

ことないこと吹き込み続けたのだ。
それで、魔力量がほとんどなくて、発言権のない俺には当然反論の余地なんてものは一切なく、そして今に至るわけだ。
「もう我慢ならん！」
「魔力がないが、本家の子ということで見逃してきてやっていたが、本家の子である、という権力を使ってウチの息子を無理矢理負かすとは！」
「追放だ！」
「ご当主、決断を！」
一族会議の中、他の大人たちが喚いている中でたった一人だけ静かに目を瞑っている男性、黒鉄本家の当主、つまり俺の親父が静かに目を開いた。
「静かにしろ。」
その一言で騒がしかった室内が一斉に静まり返った。
さすがは黒鉄の当主、主人公のお父さんだ。覇気が違うぜ。
俺がそんな事を考えている間にも、父さん（仮）は重々しく言った。
「本日より、黒鉄一輝は黒鉄家から追放とする。」
「おお！」
「ザマアミロ！」

「静粛に！」
父さん（仮）の言葉で再び騒がしくなった室内が再び静まり返る。
「黒鉄一輝は追放、黒鉄家への一切の干渉を禁止するが、それは黒鉄家も同じだ。黒鉄家は、これから一切の黒鉄一輝への干渉を禁止する。」
「おお、本格的に関係を斬り捨てる、と言うことですな！」
「さすがはご当主！」
大人たちは自分の都合のいいように解釈しているが、おそらくこれは父さん（仮）の精一杯の優しさ、というやつだろう。
おそらく、黒鉄家の中には俺をウザく思っているやつもいるし、黒鉄家から追い出されたらおそらくそいつらにリンチにされるだろう。それを回避するために父さん（仮）は俺と黒鉄家を相互不干渉にしたのだろう。
ありがとう、父さん（仮）。
俺が今十歳だから十年しか一緒にいなかったが、それでもアンタが俺を気遣ってくれることはハッキリと伝わってくるよ。
「はい。そのご処分、謹んでお受けいたします。」
内心で父さん（仮）に感謝しながら俺は頭を下げる。
さあ、これで俺を縛りつづけてきた黒鉄との縁は切れた。

これからどこに行こうか。
だが、どこに行っても不幸になることはないだろう。
俺の剣が進む道は、無敵なのだから。

タイムトラベル

「さて、これからどうするかね。」
黒鉄家の家の門を出てから呟く。
自分の剣を鍛え上げることを決めたまではいいんだが、そのことに気を取られすぎて、今の季節のことを忘れていた。
「こんな寒さで生き延びられる気がしねえ…。」
そう。今は冬なのだ。
しかも、猛烈な吹雪がやってきている。
さて、どうする。このままだと体が冷えて凍傷になって天国にゴールインする未来しか見えない。
「ま、剣を振ってれば体も温まるか。」
そう言って固有霊装、隕鉄を取り出す。
若干脳筋な思考の気がしないでもないが、剣を振ってれば体は温まって少なくとも死にはしないだろう。

多分。
「二万九千五十、二万九千五十一、二万九千五十二、二万九千五十三…。」
その後、剣を振り続けて一日が経った頃には、吹雪はほとんど止んでいた。
だが、体を温めることに気を取られすぎて、もう一つの問題に目が行っていなかった。
「腹減ったぁ…。」
そう。食糧問題だ。
考えてみれば当然の帰結だろう。
吹雪の中、体を温めるためだけに一日中剣を振っていたのだ。それで腹が減らないほうがどうかしている。
しかも、剣を全身で振り続けていたせいで、筋肉痛も酷い。
「あ…。やべ…。」
そうとだけ呟いて俺の意識は闇の中に引きずり込まれていく。
吹雪などなかったかのように、夏のような日差しが自分に照りつけていることが不思議だった。
――――――――――――――――
「ん…。」

どことなく温かい空気と爽やかな風、それに僅かに香る草の匂いらしきもので意識が浮上していく。

「知らない天井だ……。」

人生で一度は言ってみたいセリフ二位の言葉を呟いてから俺はゆっくり体を起こす。

「」

思わず絶句してしまった。

俺の目の前には、あり得ない光景が広がっていたからだ。

今時珍しい、完全に手作りらしき木製の部屋。

壁に立てかけられている、これまた今時珍しい本物の日本刀。

今時珍しい、というか中国の内陸部でも見られないような古臭い釜戸。

江戸時代か！と突っ込みたくなるような部屋の中にいることも驚いたが、それ以上に俺を驚かせる物があった。

「さ…、佐々木小次郎…、いや、ＮＯＵＭＩＮ…、だと…？」

そう。俺が寝かされている布団の横で、紺の羽織を羽織った長髪の青髪のイケメンが壁に寄りかかって寝ていたのである。

この男を見た時、俺の頭の中に一人の男の名前が浮かんだ。

佐々木小次郎。Ｆａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔに登場するサーヴァントで、クラス

は確かアサシン。そして、神業とさえ言えるであろう完璧な剣技で有名な侍である。
佐々木小次郎は、山の中でただただ毎日剣を振り続けていただけでなぜか平行世界から斬撃を呼び込むことができるようになった、いわば俺の憧れの剣士（二次元）の中の一人である。
だが、なんでそんな人物がこの世界にいるのか。
もしかして、佐々木小次郎とは実在の人物だったのか!?
俺がそんな事を考えている間に、目の前の佐々木小次郎（仮）がゆっくりと目を開けた。
「おお、起きたか、少年よ。」
なんだこの人。ボイスまで佐々木小次郎だよ。
もしかして、本物の佐々木小次郎なんじゃね？
「起きていきなりすまないが、お主が今どんな環境にいるのか説明してもらえぬか？」
「はい、それはいいんですけど、その前に一つ聞きたいことが…。」
「ああ、良いとも。言ってみるが良い。」
佐々木小次郎（仮）の言葉を聞いてテンションを上げながらも俺は聞く。
「佐々木小次郎さんですか？」
俺の言葉に佐々木小次郎（仮）は目をパチクリとさせてから言った。

「名字があるということは、武家の者だろう？あいにくと、拙者はただの農民の子。名字などあらぬよ。

だが、なぜだろうな…。佐々木小次郎という名前、どこかしっくりくる自分がいる…。」

ハイキター！決定だよ！これ決定だよ！この人絶対に佐々木小次郎だよ！

しかも、この世界にＦａｔｅのアニメはなかったから、佐々木小次郎を真似て物真似することもできない。

っつーことは、決定だよ！落第騎士の英雄譚の世界の中には佐々木小次郎はいないだろうけど、そこはおそらくあれだよ！ご都合主義ってやつだよ！俺を転生させてくれた神様アリガトー！

そんな事を怒涛の勢いで考えながら俺は返す。

「はい、わかりました。それで、あとひとつだけお願いなんですけど…。」

「なんだ？」

「佐々木さんって呼ばせてもらっても？」

「おうとも、別に構わんさ。」

いよっしゃアアアア！

心の中で大咆哮をしながら、俺は最初に佐々木さんが俺に聞いた質問について答え

る。

「ありがとうございます。それで、最初の説明なんですけど、俺はとある伐刀者の家の息子だったんですが…。」

とある伐刀者の家、と言って軽くごまかす。黒鉄家だなんて言ったら、相手に余分なプレッシャーをかけてしまうかもしれないからな。

俺が小さい頃に道場を巡り歩いて身に着けた社交術の内の一つだ。

だが、佐々木さんは俺の想像を上回る答えを返してきた。

「伐刀者?それはなんだ?」

「へ?」

思わず呆けた声が出てしまう。

いやいや、山篭りをしているとは言え、伐刀者くらいは知ってて当然だろ…。

いや、ちょっと待て。あり得ないことかもしれないが、もしかしてここは現代ではないのかもしれない。

この考えは本当にあり得ないことだが、目の前に佐々木さんがいる時点でありえないんだ。

よし、少し聞いてみよう。

そう思い、俺は佐々木さんに質問をする。

「あの…、東京ってご存知ですか…？」
「東京？何なのだ、それは？」
ビンゴ。
やはり、ここは俺のいた現代ではないらしい。
ということは、佐々木さんがいるところからして、今は江戸時代なのだろうか。
聞いてみるか。
「それじゃあ、今って将軍っていま す？」
「おうとも。随分と前にこの山に篭り始めたから名前は知らんが、将軍なら当然いるぞ？それで、なぜそんなことを聞くんだ？」
佐々木さんは俺に怪しむような目線を向けてくる。
それじゃあ、いっそ思い切って言ってみるか。
「信じられないかもしれませんけど、俺、未来から来たかもしれないんです…。」
「は？」
佐々木さんの声が、小さな小屋の中に響いた。

佐々木さん

数十秒経った後、佐々木さんは口を開いた。

「お主、頭おかしいんじゃないのか？」

いや、農民なのにいちいちござる口調使ってるアンタには言われたかねーよ！

と心の中でツッコミを入れる。

決して口には出さない。

口に出したら、佐々木さんのメンタルが壊れる気がするからな。佐々木さんって、どことなくメンタル弱そうな見た目だし。

俺がそんな失礼なことを考えているとも露知らず、佐々木さんは真面目な顔で続ける。

「確かにそういうことを考える年頃なのはわかる。拙者も十四歳の頃は同じようなことを考えてたからな。だが、むやみにそういうことを言うもんじゃないぞ？幕府に捕まる可能性だって無くはないんだからな？」

どことなく優しい目で俺を見て静かに諭す佐々木さん。

中二病にかかっている時期があったのか。
そんなことを考えながらも俺は佐々木さんの言葉を否定する。
流石に、中二病患者だと思われるのはイヤだ。
「いや、別に妄想でもなくて、本当のことなんですって！」
「ほう…。それでは、証拠は？」
佐々木さんは相変わらず可哀想なものを見る目で俺を見てくる。
おのれ、そこまで俺を中二病患者に仕立て上げたいか。
「佐々木さん、どこで俺のことを見つけたんですか？」
「ああ、山の中だとも。」
「空気が温かいし、今って夏なんですよね？」
「ああ、そうだが？」
佐々木さんの答えを聞いて実感する。
やはり、俺はタイムトラベルしてきたのか。
まず、季節。俺がさっきまでいたのは冬だったのに、季いきなり季節が夏になるわけがない。
そして、場所だ。俺がぶっ倒れたであろう場所は、平原。なのに、山の中で倒れていたところを発見された、ということはやはり場所も時間も違うところに移動してしまっ

たのだろう。なぜかは知らんが。
だが、それをどうやって佐々木さんに説明するか。
そこが踏ん張りどころ、というやつだろう。
さて、頑張って見ますか。
「佐々木さん、倒れている俺を見つけて、その後この小屋まで来たってことは、俺の体に触れましたよね?」
「おうとも、体に触れずに人を持ち上げるような器用な真似はできんさ。」
体に触れずに人を持ち上げるようなことは器用とは言わない気がするんですがそれは。
そんなツッコミを心の中で入れながらも俺は続けて口を開く。
「俺の体、冷たくありませんでしたか?」
そう。俺は確かに体を温めるために剣を振り続けていたけれども、それだけで冷気を全て弾けるわけがないのだ。
「ああ、冷たかったな。」
佐々木さんの言葉を聞いて俺は心の中で笑う。
よし、俺の勝ちだ。
「普通に過ごしていれば、冷たくなることなんてありえなくないですか?」

「いや、そうでもないぞ。この山の中には川があるからな。体を冷やすくらいできるさ。」
「いや、でも、川に入るだけじゃあ俺が倒れてた時みたいに冷たくはならないはずなんじゃないですか?」
「む、それは確かに。」
「そういうところから考えると、俺が来たのはとても冷たいところ、ということ。」
「そうだな。」
「だけど、今は夏だから、そんな場所は存在しない。」
「ああ。」
「しかも、佐々木さんが俺を見つけたとき、俺、かなり汗をかいてませんでしたか?」
「ああ、そうだったな。」
「本来は存在するはずのない場所から来ていて、しかも、その場所は汗をたくさんかくほど運動しても体が完全には温まらないほどの場所。
　つまり、強引かもしれませんが、俺は本来ありえない場所、つまり未来から来た、ということにはなりませんか?」
「そう言われると…。」
　よっしゃ、論破〜!

そんなことを考えながら畳み掛ける。
「これで納得してもらえました？」
「あぁ…。ということは、本当に未来から来たのか？」
「だから、そう言ってるじゃないですか。」
佐々木さんのボケッとした顔が印象的だった。

NOUMIN

「それで、お主が未来から来た、というのは真実だとして、だ。」
ポケっとした顔から一転。
佐々木さんはその顔を元の表情に戻した。
口元は愉快そうに歪んでいる。
本能的に恐怖を感じ取ってしまった。
「お主、体から剣気が漏れ出ている。中々に強いのであろう？」
飄々とした雰囲気はもうそこには存在しない。
その群青の瞳はただひたすらに俺の瞳を見つめていて、心の中でも読まれているような錯覚を覚えてしまった。
道場に通いまくって上級者たちの剣を受け続けてきたせいだろうか。
目の前の男、佐々木さんから漏れ出る、見るだけで人を切れそうな程の剣気に、俺の体は急速に警戒態勢に入る。
無意識の内に手に出現させた隕鉄を見て、佐々木さんはますます笑みを深くする。

「ほう…。何もないところから剣を取り出すとはな…。妖術の類か？」
俺が隕鉄を手に握り、威嚇のつもりで殺気を向けているにも関わらず、佐々木さんは一切その笑みを絶やさない。
強者の余裕、というやつだろう。
ふざけた調子で佐々木さんは問いかけてきた。
もっとも、その目が全然笑っていない辺り冗談にならないが。
「いやいや、妖術なんてそんな大層なものは使えませんよ。俺は才能がないんでねぇ…。」
才能がないなんて残念だなぁ…、と心にも思っていない言葉を呟く。
佐々木さんはさっきから殺気を徐々に大きくしているので少しでも意識を逸らそうと軽口を叩いてみるが、何故か逆効果だったようだ。
口元の笑いを更に深めながらも佐々木さんはその目をスッと細める。
切れ長の目と群青の瞳に何が映っているのかはわからないが、少なくとも俺とは次元の違う物が見えているのだろう。
佐々木さんは鋭く俺の全身を見てから、いきなり圧を抜いた。
ホッ。
思わずそんなため息が漏れる。

思ったよりも緊張していたのだろう。
黒鉄の家で父親がくれた暖かめの服が汗に濡れて背中に張り付く。
夏の暑さではここまで汗を掻くことなんてできやしない。
ここまでのプレッシャーを持っているとは。
正直、ＮＯＵＭＩＮ舐めてた。
前世で見たＦａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔ／ｕｎｌｉｍｉｔｅｄ　ｂｌａｄｅｗｏｒｋｓの中では簡単にアルトリアにやられてたからわかんなかったけど、間近で相対するとここまでの覇気を持った人物だとは。
やっべぇ。
俺が何をされるのか、今更ながらに心配になってきたんですが。
青ざめているであろう俺の表情を佐々木さんはバツが悪そうにチラリと見る。
そして、口を開いた。
「いや、すまんな。未来から来た剣客など初めてなもので、ついつい実力を見定めようと剣気を漏らしてしまった。」
嘘だろオイ。
あれ程の圧力を伴う剣気が、ただの漏れ出しただけの物だってのかよ。
ヤバイ。

コレはヤバイ。
俺の本能が全力でこの人に逆らってはいけない、と警鐘を鳴らしているんだが。
固まっている俺に向かって、佐々木さんは愉快そうに言った。
「お主、一度拙者と戦ってみんか?」
ーーーーーーーーーーーーーーーーーー
竹がぼうぼうに生えている竹林の中、俺たちは向かい合っていた。
竹林の中で思い切り切り合えるようなスペースを探すのは中々に難航したが、それでもようやく見つけることができた。
周りの竹が日光を遮っているせいで、地面には木漏れ日のみが降り注いでいる。
チュンチュン、という小鳥のさえずりも響き渡っており、竹林の中で寝転びたい衝動に駆られる。
もしも、この目の前から放たれる圧がなければ、だが。
若干目が絶望で死んできていることを実感しながらも前を向く。
俺の視界に入り込んでくるのは、羽織を纏った剣客だ。
というか、佐々木さんの剣気が凄すぎて逆に視線が反らせないんだが。
もわもわした生ぬるい空気の中、背中に冷たい汗がつたる。
「では、始めるとしようか。」

佐々木さんが声を上げ、背中に背負っていたメッチャ長い剣、通称物干し竿を抜いた。
「来てくれ、隕鉄。」
佐々木さんが刀を抜くのと同時に俺も口を開いて隕鉄を呼ぶ。
木漏れ日が、黒い刀身に当たって周りには弾けた。
「それじゃあ…、先に行かせてもらいます!」
口を開いて気合を入れ、佐々木さんに向かって走り出した。
「ああ、来い!」
佐々木さんも笑って答えてくれる。
佐々木さんの構えはだらりと剣を下ろしたもので、傍から見ればただ単に剣を持ってダラッとしているだけにしか見えない。
「フッ!」
十五メートルほどあった距離を一秒で詰めて剣を振るう。
剣の速度、足の踏み込み共に完璧。
前にちょっかいをかけてきた黒鉄分家の子供だったらこれでやられたのだが…。
「シッ!」
カーン、という金属がぶつかり合う甲高い音とともに隕鉄が弾かれた。
佐々木さんの元々の体制は、だらりと脱力したもの。

つまり、人間が剣を振る上で最も大切な姿勢の一つである自然体だ。
だが、完璧な自然体になれるものは多くない。
黒鉄家の英雄的な存在の黒鉄龍馬だとか、かなりの実力者でなければ自然体のまま実戦に臨む者などいないだろう。
「マジ…、かっ…！」
隕鉄を弾いた状態から一瞬で体勢を切り返し、もう斬る準備はできている、とでも言わんばかりに煌めく物干し竿を見て思わず声が漏れる。
ダラッとした体勢から隕鉄を自然に弾き、一瞬で体勢を切り返す。
そんな今の俺では到底できないことを、佐々木さんはいとも簡単にやってのけた。
つまりはそういうことなのだろう。
いくら俺が足掻いたところで、この侍には勝てない。
その事実は、最強を目指している俺の心に突き刺さる。
「フッ！」
目にも止まらない速さで振られた物干し竿を、直感と感覚で体を大きく反らして避ける。
俺の服が、ピリッと切り裂かれた。
だが、そんな事を気にしている暇はない。

弾かれたままの体勢で上に反らされていた隕鉄。
思い切り右腕を下に振り下ろして、それを俺の目の前、何もないところに振り下ろした。
ガキン、という音が鳴る。
隕鉄が触れているのは、佐々木さんの物干し竿だ。
俺が体勢を立て直している隙にもう一回振ったのだろう。
ホントなんなんだよこの人。
マジで人間じゃないんだけど。
心の中で愚痴りながらも今度は隕鉄で相手の物干し竿を弾く。
下から切り上げるように鋭く剣を振るう。
だが、そんな一撃も届かない。
佐々木さんはその物干し竿の腹を隕鉄に当て、やんわりと受け流した。
受け流された状態で左足を地面にめり込ませる。
そして、思い切り蹴りを放った。
「ッ!?」
驚いたような顔をしながらも佐々木さんは後退する。
そりゃそうだ。

お互いに剣を持って勝負しているのだから、足を使うとは思うまい。
佐々木さんの顔を驚きで歪ませられたことに少し笑みを浮かべながらも蹴った右足で地面を踏みしめ、距離を詰める。
上段の唐竹割。
佐々木さんは同じように剣を振って隕鉄を抑え込む。
先程見た佐々木さんの剣技を真似るように少し隕鉄をずらし、隕鉄の腹で物干し竿を受け流す。
「ほう…」
驚いた表情を浮かべたのはほんの一瞬。
佐々木さんはそのまま振り下ろした俺の隕鉄をするりと避ける。
そして、物干し竿を持って再び自然体になった。
「ハァァッ！」
気合を入れて剣を振り下ろす。
佐々木さんは斜め下から物干し竿を振って隕鉄を弾いた。
ここまで技術に差があるのならもうヤケーーになるようなことはせず、縦、横、斜めに数え切れないほどの回数で隕鉄を振る。
だが、そんなもので惑わされる佐々木小次郎ではなかった。

佐々木さんは俺の剣を見切って全てを全く同じ威力で返してくる。
「オオォッ！」
裂肛の叫びを上げて振られた隕鉄と、静かに振られた物干し竿が、チリチリと火花を立てながら鍔競り合った。
このままやってもキリがない。
そう判断し、俺は隕鉄に一段と力を込めてから急に力を抜いた。
力を込められた隕鉄に呼応するように佐々木さんも力を込めたが、俺が急に力を抜いたことでその勢いが俺を押し出した。
「フゥ…」
火照った体で一つため息を吐く。
まず前提条件として、俺は佐々木さんよりも剣の腕が低い。
それこそ、今は逆立ちしても勝てないだろう。
だったら隕鉄の能力に頼るのはどうか。
隕鉄の能力は身体強化。
俺は佐々木さんと戦っているときにせいぜい身体能力を二倍くらいにしか上げていなかったが、やろうと思えば三倍には上げられる。
それなら、少しは勝率があるのではないか。

……いや、無理だな。
佐々木さんの技量だったら、相手の身体能力が高くなった程度で動揺したりしないだろうし、ましてやその隙を突いて勝利なんてできやしない。
つまるところ、積んだ、というやつである。
勝てる可能性はゼロ。
まあだが、アレを試すにはちょうどいい機会だ。
無意識の内に口角が上がっていたらしい。佐々木さんはますます興味深そうな目つきで俺を見ている。
そうだ。
佐々木さんは俺が逆立ちしても勝てないほどに強い。
だったら、現時点で俺ができる最強の技を使っても死んだりはしないだろう。
覚悟を決め、下に向いていた顔を上げる。
「さて…、これで終わりにします…。」
今の自分ができる限りの剣気を放出する。
佐々木さんは、その余裕気な笑みを消した。
俺は立ったままぶらりと隕鉄を持っている右腕を垂らす。
「ほぉ…」

佐々木さんが感心したような声を上げた。
俺も子供だし、子供が自然体になれるだなんて考えてもいなかったのだろう。
自然体のまま、前にぐらりと重心を傾ける。
そして、一瞬で佐々木さんの前に辿り着いた。
目の前には佐々木さんの見開かれた瞳。
佐々木さんが驚くのも当然だろう。
今使ったのは、全国の道場にいた縮地を使える剣客の動きをトレースしまくった結果編み出された、独自の縮地モドキなのだから。
勢いを殺さずに大きく呼吸を一つ。
その間に、俺は四回の斬撃を繰り出した。
一呼吸の間に四回の斬撃を繰り出すというやった自分でも頭可笑しいんじゃねえの、と思う程の斬撃を佐々木さんはいとも簡単に弾いてみせた。
だが、俺の本命はこれではない。
先程佐々木さんがやってみせたように、斬撃を放ち終わった体勢を無理矢理整えて剣を水平に構え、体でそれを隠すようにする。
いわゆる燕返しの構えをした俺に佐々木さんは焦ったような顔をする。
だが、もう遅い。

ニヤリと笑った俺はーーーー、同時に二つの斬撃を、繰り出した。
取った。
確信して笑みを浮かべる。
だが、そんな俺の目に映ったのはーー、ブレる佐々木さんの体だった。
手から伝わってくる衝撃。
視界の端から闇が滲んでくるのを感じながら、俺は地面に倒れ伏したのだった。
「全く、無茶をしてくれる…」
呆れたような佐々木さんの声が、耳の中に響いて消えた。